慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	近来四十余年おぼえがき
Sub Title	A memoir of forty odd years
Author	岩松, 研吉郎(Iwamatsu, Kenkichiro)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2008
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.95, (2008. 12) ,p.I- VII
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	岩松研吉郎教授高宮利行教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00950001--004

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

近来四十余年おぼえがき

岩松研吉郎

「年譜」「目録」と、ことあらためてしるす程の年歯・閲歴といえない。が、義塾文学部文学科（今は人文社会学科文学系）とその藝文学会をさるにあたって一分冊で記念していただくのは大変ありがたいことだから、ひとつの節折として、この間のことを報告する必要はあるだろう。おぼえがきの形でのべることとする。

一九四三年うまれだから、もの心ついてずっと「戦後」の気分と教育の中でそだった。ということは、何についてもたてつくを可とし、またそれがそれなりに是とされ、の中ということで、この気楽さは、ある部分今にいたっている。

六二年、義塾工学部（今の理工学部）に入学、二年次までで転部して、六四年春、文学部文学科国文学専攻二年にはいった。六七年に卒業して、大学院文学研究科国文学専攻の修士課程に進学、六九年に修了、博士課程にはいり、七三年三月まで在籍した。

右の一〇年程の時間は、大雑把にいって、半分を学生運動活動家としてすごし、半分を学生・院生としての勉強にあてた、となろうか。両面は、自分では交錯させていたつもりで、文芸・文化研究について、歴史社会学的・文献学的・民俗学的・言語学的等々の諸方法でのみわたしをまなんだが、それらは結局、今にいたるまでの混淆雑学となった、ともいえる。

それでも、その間に、この国の社会制度でもある文化・文芸については「和歌」そして「短歌」が基軸のひとつだ、という見地がさだまった。学部卒業論文「『為兼卿鹿百首』論」（後に藝文学会発表、六九年七月）、修士論文「藤原為兼論序説」は、折口信夫の「短歌本質」の概念を、いわゆる京極派について検討したものだ。したがって、「（制度）和歌」と「（折口信夫＝釈迢空）短歌」とは、つづけてかんがえてゆく主題として、七三年四月に非常勤講師、七四年四

月に助手に任用されて以来、講義・演習のどれかでとりあげてきた。それは、七七年助教授、九二年教授以後も同様で、この数年の講義のひとつも和歌原論というべきものだ。

右についての調査・整理・分析としてかいたり発表したものは次のとおり。―「折口信夫旧蔵慶応義塾図書館蔵・林下集翻刻」(『藝文研究』三三号、七四年二月、川村晃生氏と共編)、「釈迢空全歌集の計画」(国文学研究会発表、七四年六月)、「『景物』の周辺―言語規範としての国家」(『詩と評論』一号、七四年八月)、「『年号』と『四季』―天皇制論の周辺」(『第三文明』、七五年二月)、「古典和歌」(『日本の古典』一七巻、世界文化社、七六年五月)、「『倭をぐな』論―その周辺」(『国文学』、七七年六月)、「釈迢空『東京詠物集』をめぐって―よみのこころみ」(『藝文研究』四〇号、八〇年九月)、「短歌的叙情は乗り超えられたか」(座談会、『詩と思想』一一号、八〇年一二月)、「『題』―和歌についてのノート」(『三色旗』、八一年六月)、「玉葉和歌集」(『新編国歌大観』一、角川書店、八三年二月、福田秀一氏と共編)、「花は何色―和歌史の一側面」(藝文学会発表、八四年六月)、「窓の周辺―京極派歌風の一面」(『藝文研究』四六号、八四年一二月)、「重家集」「林下集」(『新編国歌大観』三、角川書店、八五年三月、川村晃生氏と共編)、「万葉旅行」「身毒丸」(『別冊国文学・折口信夫必携』、八七年五月)、「『倭をぐな』について―その一面」(『短歌』、八七年一一月)、「二十八品並九品詩歌」(『新編国歌大観』一〇、角川書店、九二年四月、中川博夫氏と共編)、「迢空―戦争と戦後」(『短歌』、九三年一一月)、「迢空と応制歌」(国文学研究会発表、〇三年一一月)、「迢空短歌―昭和二十年」(『三田文学』七五号、〇三年一一月)、「釈迢空=折口信夫の〈承詔必謹〉詠」(国文学研究会講演、〇八年一一月)。

大学院生の間、七二年度からは、義塾国際センターで留学生への日本語教育の非常勤講師になって、日本語学のにわか勉強をしながらおしえてゆくことになる。

七五年までつづけた後、八四年から九五年までまた担当した。日本語教育学という分野が形成されてゆくのを、手つだいの立場で傍観しているだけだったから、私はその面の専門研究はしていない。けれども、教材の準備・整理や教室の経験の中から、全般的には現代日本語の運用の問題、特定にはマンガの言語の問題への関心が生じて、そこから、次のようなあれこれをかいたりはなしたりすることとなった。

「外から見た日本語」（シンポジウム記録、『三田評論』、八四年六月）、『磯野家の謎』（飛鳥新社、九二年一二月。後に集英社文庫・九五年、日本文芸社パンドラ新書・〇五年）、『磯野家の謎・おかわり』（飛鳥新社、九三年三月）、『日本語の化学』（ぶんか社、〇一年四月。後に改版・改題して『日本語の化学』、日本文芸社パンドラ新書・〇五年）、「自由な言葉、寛容な日本語」（『黙』、〇二年九月）、「気になる『日本語』にどう向き合うか」（座談会、『三田評論』、〇四年一〇月）、「ゆれる日本語、ずれる日本語」（『文藝春秋』臨時増刊、〇五年三月）、「ちゃぶだいとはん台」（『遊歩人』、〇六年二月）。

なお、非常勤講師として九四年から九七年度まで白百合女子大学文学部児童文化学科でおこなった講義も、主に子供マンガについてだった。一方、文化学院文学科には、七七年度から〇四年度まで、ながく出講し、中世諸分野の話をしていたけれど、ここでも、言語文化史に重点をおく形になっていったのは、上の事情がかかわっていただろう。

学部・大学院での担当は、主として中世の和歌・軍記・説話と文学史等。和歌に関しては、前記のように、院政期から南北朝期頃（とくにいわゆる新風和歌）を中心とし、散文分野では、軍記とその周辺の説話・伝承・芸能台本（とくにいわゆる判官物）の講義・演習がおおかった筈である。言葉に即しての「よみ」、言語文化史・文芸史の「しかけ」「しくみ」をもっぱら問題としてきたから、テクストの周辺・基盤を低徊し、まとまりをまだほとんどつけていない。今の

ところ、次の程度だ。

「社会史と日常―網野善彦の近業をめぐるテキスト論ノート」（『三田国文』四号、八五年一〇月）、「母と子の間―『義経記』ノート・1」（『三田国文』七号、八七年六月）、「巻六の静について―『義経記』ノート・2」（『藝文研究』五七号、九〇年三月）、「義経と芸能説話」（説話文学会例会発表、九一年四月）、「ニッポン古典うひやまふみ」（『ノーサイド』、九四年一二月）、「『平家物語』の謡跡を訪ねる」一～一二（『観世』、九八年四月～九九年三月）、「巡礼記研究の視界」（『巡礼記研究』一号、〇四年一二月）、「九月の感情」（『三色旗』、〇五年九月）。

くわえての諸点。八八年度からは、中世文芸と関連諸学研究のために、義塾内外のわかい友人・院生・学生と共に、毎月「慶応義塾中世文学研究会」をひらいてきて、きたる〇九年三月の終回までで二二六回となる筈である。私の何回かの報告をふくめた内容一覧は、ここにはむろんしるす筋合でないが、そこで議論をかわした諸君の何人もが本分冊に成果の一端をしめしている。

また、一〇年前にはじめた大学院博士課程の巡礼記・寺社縁起の演習は、これも塾外若手研究者がくわわって、「巡礼記研究会」なる小学会に発展し、〇四年から研究誌の刊行・研究集会の開催をつづけている。会の主要課題の『建久巡礼記』の総合注釈が、本年度までにしあがらなかった点は、〇五年にはじめた徳川記念財団との「『幕朝年中行事歌合』研究会」での同歌合注釈がいまだ半途であるのとおなじく、私にすくなくも一半の責任があるが、ちかい成業を期するしかない。

随分と以前からの会としては、とおく六七年夏の通信教育学生自治会の自主講座でインストラクターを依頼されたことに発する、今は「三田国文学研究会」と名のっているものがある。沢山のテクストの講読をしてきて、現在は『源氏

物語』第三部をよみはじめて五年余、「宿木」まできているが、これも前途なお、といわなくてはならない。

「三田文学会」は、学部・専攻と直接つらなるものではないが、前次刊行期の七五・七六年に「私の中の古典」「戦後の文学を語る」各シリーズのインタヴューアーを計一〇回つとめて以来のかかわりで、エッセイ・書評等をかき、この数年程は運営にも関与してきた。関連して、国文学専攻でだした『三田文学の系譜』（三弥井書店、八八年一二月）に「資料・水上瀧太郎在外書簡—仙波均平宛」をまとめたことがある。

以上の他、辞・事典の項目、書評、教材、諸講座・団体の冊子・資料等は、省略にしたがう。

——総じて、まことに前世紀・前時代の気楽＝ずぼらの軌跡という他はない。四迷の、勤勉と真面目はひとしいわけではない、との言をつけくわえても、おそいようである。